

《全寮制機人ハイスクール》

念話通信ネットワーク起動。通信機器エラーチェック——完了。接続端末番号S2075。ユーザ名『ウエンディ』。脳波パターン認証——完了。通信経路開放。

大脳の神経ネットワークに情報が流れ込み、視覚野に「光」があふれる。

「おっはよーッス」

「ん、ウエンディか。おはよう。珍しく早いな」

『リビングルーム』にいたのは姉のチンクだけだった。大量のディスプレイを周囲に浮かべ、書類に目を通していているらしい。

「あれ、他のみんなはまだ寝てるっスか」

ウエンディは少し意外そうに言った。この部屋は機人素体^{すいぞくかん}育成施設に所在する戦闘機人姉妹のたまり場となっている。暇な姉妹達が何人か転がっていてもおかしくないのだが。

「まさか、みんな出歩いているだけだよ」

投影ディスプレイの一つを指で弾くチンク。円盤状のディスプレイが彼女の眼前に開く。テロップには「ライブ中継——外周監視カメラG地区34番」とある。画面には朝日に

照らされた海岸線が映っていた。比較的大き目の岩石がごろごろと転がる様子は、浜と磯の中間といったところか。

風光明媚というよりは荒涼という表現が当てはまる風景を、三つの影が進んでくるのが見える。

先頭を走るのはトーレ、続いてセツテとディエチ。

『Up in the morning to the rising sun. (日の出と共に起き出して)』

無限に続く波の音に混じって、トーレのドヤ声が流れてくる。

『『Up in the morning to the rising sun.』』

続いてセツテとディエチの声。歌うというよりは怒鳴っているのに近い。

『Gotta run all day. till the running's done. (走れと言われて一日走る)』

「な、何スカ、これ」

『『Gotta run all day. till the running's done.』』

『どうしたっ！ 二人とも、声が小さいぞー！ Ho Chi Minh is a son of a bitch. (ホー・

チ・ミンはろくでなし)』

『ほーちー、ゲホッ、ゲホッ』

『ひーっ。トーレ姉、きついってばー』

セツテもかなり参っているが、特にディエチはかなりグロッキーになっているようで額から滝のように汗を流している。

「うっわぁ・・・」

そうこうしているうちに三人はカメラ前を通り過ぎ、視界の中で小さくなっていく。あの妙ちくりんな歌も聞こえなくなった。映像中継が別のカメラに切り替わるが、望遠撮影らしく音声は入ってこない。

「えっと、チンク姉。三人は一体何をやっているんスカ」

「何って、見て判らないか。朝のランニングだ。トーレは毎日やってるよ」

「いや、私ら戦闘機人が走りこんでも筋力増えないんじや。それにセツテもディエチもまだ戦闘用の手足じゃないし」

戦闘機人は機械との適合性を高めるよう遺伝子操作されて生まれてきた存在であり、手足や内蔵器官の一部がサイボーグ化されている。戦闘機人No. 7セツテとNo. 10ディエチは少し前にその手術を受け、今は出力の低い一般医療用の義肢を装着して動作訓練を行っている。

「心肺機能とか、他にも胴体の筋肉で機械化してない部分があるだろ？　そういう所を鍛えるんだ」

「あ、だから声を出して咽を鍛えてたんスね」

「咽じゃない。呼吸機能だよ・・・」

仕方がない奴だと言いたげに首を振るチンク。

「お前達は生まれてからずっと運動らしい運動をしてこなかったんだ。鍛える場所は幾らでもある。だからウェンディ、君も手足がついたら一緒に走るんだよ」

「えっ、もう決まっているんスカ」

「決定事項だ。もう朝寝坊はさせないよ」

「うー・・・手術受けたくなかったっス」

彼女はまだサイボーグ手術を受けていなかった。現実的な意味での『本当の』ウェンディは、一切の衣服を身に着けず、それどころか胴体の一部が不自然に凹み、手足すら生えていないグロテスクな姿という、あらゆる意味で十八歳未満お断りな状態で機人育成ポッドの中に納められている。

もちろん彼女が自由に外を出歩く事などできる訳がない。実際の彼女は育成ポッドに入っただけで、念話通信で外部と映像・音声情報をやり取りしているのである。

これはサイボーグ手術を受けるまで何年間も育成ポッドから出られない機人素体たちに対し、効率的な教育を行うために開発されたシステムだった。彼女達は機人として「誕生

する」までの数年間、これを最大限に利用して一般教養（ミッドチルダ基準で言う初等部・中等部レベルの義務教育）を学び、シミュレータで手足の動かし方を練習する。

『リビングルーム』はそんな機人姉妹達のために与えられたネットワーク内におけるコミュニケーション空間を、主観的に表現するときの呼称だった。もちろん相手の姿が実体投影されるような、仮想現実的な意味でのリアリティがあるわけではない。しかしネットワーク上での通信主体としての相手の存在を相互に「感じ取る」事はできる。育成ポッドの中で常に五感刺激に乏しい環境におかれている彼女達にとつては、健全な人格の形成上必要不可欠と言って良いシステムである。

「なんだ、普段はあれほど『早く外に出たい』と言っているのに。ん？ ちょっと悪い」
チンクに周りに浮かぶ情報ディスプレイ（これは現実世界でも彼女の周囲に投影されている）の一つの表示が切り替わった。交互通信ラインの開放要請が来ている。

ライン・アクティヴ。相手は白衣を着た中年女性だった。夜勤シフトの医療スタッフ^{メデイカル}。

「おはようございます先生」

『おはようチンクちゃん、オットーちゃんの検診が済んだわよ』

「はい。それで、容態の方はどうでしょう」

『生体部分は異常無しね。接合部分も問題ないし、明らかに義肢内部でトラブルが発生し

ているわ。これ以上の詳しいことは私には判らないけど、義肢開発チームメカトロニクスに始業したら診てもらおうよう連絡を入れておいたから』

「わかりました。ありがとうございます」

『それと、博士の方にはちゃんと連絡入れた？』

「はい、先ほどウーノに連絡を入れたので、伝わっているとおもいます」

『できれば直接通信でオットーちゃんの顔を見せたほうがいいわよ。博士、下の子達と接する機会が少ないって最近悩んでるみたいだから』

「はい。わかりました」

『じゃあね〜』

ライン・ノン・アクティヴ

「ふう。ひとまず安心か」

「一体何があったんスか？」

安堵の息をつくチンク。相对通信なので、この会話についてウエンディにはチンクの発言しか聞こえていない。

「オットーが動作けが不全をした」

「えええっ、そんな」

戦闘機人No. 8オットー。彼女もまた二週間前にサイボーグ化手術を受けた身で、や
つと補助器具無しで歩けるようになったところである。現在装備しているのは新規開発で
もなんでもない民生品のノーマル義肢だから、それでトラブルが起きたとなると事だ。

「詳しいことは本人に聞きたい。というか私も聞きたい」
チンクが虚空を指差す。

——ユーザーログオン。「オットー」さんが入室しました。

システム音声と共にリビングルームに入ってきたのは、その話題の当人だった。

「オットー。身体の方は大丈夫か」

「はい、チンク姉様。ご心配をおかけしました」

「オットー、オットー、怪我したって、大丈夫なんスか？」

駆け寄って抱きつくウェンディ。もちろん仮想空間上での位置情報で、という意味なの
で抱きつかれた本人は特に動じていない。いや、元々感情の起伏に乏しい娘なので、現実
で抱きつかれてもこうかもしれないが。

「大丈夫です。ウェンディ姉様。ただ左足と左手が機能不全なので、ベッドから動くこと
ができません」

「そうか・・・」

「一体どうしたんスカ。いきなり怪我って。昨日までは元気だったのに」

「・・・」

言葉を伏せるオットー。

「え、聞こえないっスよ」

「・・・今朝、目覚めたら僕は床に横たわっていて、更に左足と左手が動かなくなっていたんです」

「は？」

ぼそぼそと答えるオットーに対し、チンクが身も蓋もない解説を入れた。

「要するに、寝相が悪くてベッドから落下して、その拍子に手足を壊したんだよ」

「・・・」

「・・・」

あまりの回答に沈黙するウェンディ。そしてうつむいて沈黙を続けるオットー。

「オットー、それは幾らなんでも」

間抜けすぎるんじゃないスカ？ とは流石に無神経な彼女でも言葉にできない。

「睡眠中の義肢動作コントロールに関する訓練なんて受けていません。これは想定環境外の偶発的事故です」

オットーは手足を手に入れてからまだ日が浅い。そのせいだという事にしたいらしい。

「なるほど、確かにそうっス」

「ウエンディ、誤魔化されてるよ。難しい単語が多いからって思考停止して同意するな」

「っは！ そ、そうっスね」

「大体、ベッドで寝るからこんな事故が起きるんです。育成ポッドがあるのに」

「いや、オットー、育成ポッドの事はもう忘れるんだ。外に任務で出たら、夜は確実に普通の人間と同じように寝なければならぬんだよ」

確かに考えるようによっては、機人育成ポッドは五つ星ホテルでもお目にかかれないような最高級ベッドと見なせない事もない。反重力とゲル状液体による浮遊支持式で、寝返りを打たなくても床ずれする恐れがない（一部の高所得者向け医療機関や、卑近な例では何かラブホテルに似たシステムが導入されているらしい）。だが戦闘兵器がこれでは眠れないようでは問題だ。

「・・・わかりました」

「とりあえず、ベッドに柵をつけてもらおうようドクターに頼んでおくから。まずは安心して身体を直すことに専念するんだ。義肢チームに謝りに行く時は私も一緒に行くから」

「はい」

「うーん、手足があるって意外と大変な事なんすね」

「いや、姉^{あね}も他の娘もこれほどまでに酷くはなかったんだが・・・」

これも個性というべきなのだろうか、と小声で続けるチンク。

——ユーザーログオン。「セツテ」さんが入室しました。

——ユーザーログオン。「ディエチ」さんが入室しました。

「あー、疲れた。トーレ姉はきつすぎるよ。軍隊じゃないんだから」

そうこうしている内に、トーレの早朝ランニングから開放された二人が入ってきた。相
当絞られたようで、仮想空間上ですら疲労が溜まっているように感じられる。

「あ、ディエチもセツテもおはようっス」

「おはよ。今頃起きてきたのか、寝坊助めー」

「おはようございますウエンデイ」

「二人とも朝トレお疲れ。トーレは？」

「私達に合わせると自分のトレーニングにならないからって、一人で走りに行っちゃったよ。もの凄^{すごい}い速さで」

「そうか」

鍛えている鍛えていない以前の問題として、ディエチやセツテはまだ戦闘用の義肢を装

備していない。たとえ二人が身体性能ギリギリの運動をしたところで、引率しているトールにとっては全く負荷にならないだろう。

何しろ彼女の身体能力は、スカリエッティ博士が今までに生み出したウーノからセインまでの戦闘機人の中でも最高レベルなのだ。Sランクの身体強化魔法を付与した魔導師に匹敵するという彼女の義肢出力をもってすれば、過負荷状態でなくとも楽々と一〇〇メートル走で一〇秒を切ることができる。

「二人とも、午前の通信教育が始まるまでまだ時間がある。機体洗淨して頭をすっきりさせてきたらどうだ」

「そうしようかな。セッテ、行こう」

「はい」

チンクに進められるがままに退席していく二人。ちなみに外の世界に出たばかりのデイエチやセッテたちにとって、「熱いシャワー」と「毎回異なるメニューの食事」は育成ポッド中での漬物生活では味わうことのできなかつた楽しみになっているらしい。未だ「漬物」状態にあるウェンディにとっては、二人の話を聞いて幾ら想像を膨らませても追いつかない話題だ。

「いいなあ、私も早く手足を貰って機体洗淨してみたいっす」

「・・・ウエンディ、またさつきと言っている事が変わっているよ」
こうしてまた、機人達の忙しい一日が始まる。

シャワーから帰ってきたセツテとディエチが、再度ネットワークに接続してきた。
「二人とも、遅いっスよー」

「危ない危ない、危うく遅刻しかけた」

「ディエチが長湯しすぎるからです。髪を整える時間を考えて入浴してください」

ちなみに現実のディエチは、まだ湿った頭髪を包む様にして頭にタオルを巻いている。
そして三〇分ほどしてトーレに見つかって、ここはパブリックスペースなんだからTPOをわきまえろと叱咤される未来が待っている。

ついでに言うと言装も酷いもので、ぴっちりとした青のナンバーズスーツ（流石に風呂上りに着たものではない）ではなく、屈まなくても胸元が露出しそうなどぶだぶのタンクトップにショートパンツ。いくら風呂上りとはいえ、他の研究員が往来する場所でこれでは規律に厳しいトーレでなくても少しは羞恥心を養えと叱りたくなる。

「まー、でも、まだ双子が来てないじゃん。大丈夫だよ」